

養護教諭のコーディネーション行動に関する研究動向と課題

鈴木 薫^{1,2}

本研究の目的は、養護教諭のコーディネーション行動に関する研究の動向と今後の課題について検討することである。研究動向を調べるために、「養護教諭 コーディネーション」「養護教諭 コーディネーション行動」「養護教諭 コーディネーション能力」「養護教諭 コーディネーション機能」をキーワードとして、Google Scholarにて検索しヒットした論文の中から22の論文を選び、その内容を「KH Coder」を用いて分析した。その結果、研究の動向は、「心の健康」「特別支援教育における医療的ケア」「子供への対応と連携」「コーディネーターの役割と機能」の4つに分けられることが明らかになった。今後の検討すべき課題は、コーディネーション行動に職場環境、パーソナリティやモチベーションがどのように影響するかについてである。

The purpose of this study was to examine trends of studies and future issues relating to coordination activities of *Yogo Teacher*. To check a study trend, with 「*Yogo Teacher* coordination」「*Yogo Teacher* coordination activities」「*Yogo Teacher* coordination ability」「*Yogo Teacher* coordination function」 as the keyword, the paper of 22 was chosen from the papers which were searched and hit with Google Scholar, and the contents were analyzed using 「KH Coder」. As a result, below became clear characteristics of this study were organized into four categories, namely health related issues of "mental health" and "medical care in special needs education", as well as "responsive action and coordination for children" and "roles and functions of coordinators". Examining the relationship between work environment, personality and motivation, which may have impact on coordination activities, the issue which should examine future.

Study trends and issues for coordination activities of *Yogo Teacher*

キーワード

コーディネーション行動 coordination activities

養護教諭 *Yogo Teacher* 研究動向 study trends 課題 issues

所属

1 広島文化学園大学大学院 Hiroshima Bunka Gakuen University

教育学研究科 Graduate School of Education

2 就実大学教育学部

Faculty of Education, Shujitsu University



I はじめに

近年の急激な社会環境や生活環境の変化により子供たちは心身に様々な影響を受け、様々な健康問題が表面化している。生活習慣の乱れ、いじめ、不登校、児童虐待などの心の問題、アレルギー疾患、性に関する問題や薬物乱用、感染症などの現代的な健康課題、医療機関等との連携を必要としている子供の増加など保健室来室の背景にも心に関する問題を抱えている子供が多い¹⁾。学校においては、子供たちへの適切な対応と問題解決が必要であり、養護教諭には、現代的な健康課題や地域の関係機関との連携を推進するコーディネーターの役割が一層強く求められている²⁾。これまでの研究や日々の実践で蓄積してきた知を明らかにし、今後に生かしていく意義は大きい。

「コーディネーション」は、同等、対等（協調）関係、調和、（作用などの）調整・一致、（筋肉運動の）協同・整合、（化学）配位等の意味をもち、「調整」は、①調子の悪いものに手を加えてととのえること、②ある基準に合わせてととのえること。過不足なくすること、③つり合いのとれた状態にすること等の意味をもつ。また、コーディネーションに関する定義については、教育、障がい者福祉、病院看護、地域看護の研究領域の定義内容から、①異なる分野・業種間をとりもつ、②様々な提供主体によるサービスを調整する、③個別とシステムの2つのレベルであるという3点の共通するコーディネーションの定義属性が見られる³⁾。教育領域においてコーディネーションの必要性が取り上げられた背景には、不登校やいじめなどの問題の増加に伴い、学級担任一人が児童生徒に対応するのではなく、複数の援助者が協力する体制をとる必要性の高まりがあった。心理教育的援助サービスのコーディネーションの定義を瀬戸・石隈⁴⁾は、「学校内外の援助資源の調整

をしながらチーム形成し、援助チームおよびシステムレベルで援助活動を促進するプロセス」とし、コーディネーション行動には個人支援レベルとシステムレベルの2つのレベルがあると報告した。養護教諭のコーディネーション機能に関する文献では「ケアの調整・統合をし、ニーズを組織的に解決するようにすること」⁵⁾、「異なる分野・業種の間をとりもって、それぞれの関係者だけではやりにくい調整の仕事を取捨選択してバランスよく行うこと」⁶⁾、「個人や組織等、異なる立場や役割の特性を引き出し、調和させ、それぞれが効果的に機能しつつ、目標に向かって全体の取り組みが有機的、統合的に行えるよう連絡・調整を図ること」⁷⁾と、看護領域面と心理教育領域面から捉えている。

養護教諭のコーディネーションに関する2013年までの研究における中心的な健康課題は医療的ケアと心の健康のふたつであった。その後も「特別支援学校における医療的ケアへの今後の対応について」⁸⁾、「教職員のための子供の健康相談及び保健指導の手引き」⁹⁾、「子供たちを児童虐待から守るために―養護教諭のための児童虐待マニュアル―」¹⁰⁾、「チーム学校としての学校のあり方と今後の改善方策について」¹¹⁾、「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」¹¹⁾、「発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制ガイドライン」¹²⁾などの新たな提言や通知などが出されている。そこから見えるのは、複雑化した子供の健康課題への対応に向けた養護教諭のコーディネーション研究に対する期待であり、豊かな教育実践や研修、養成教育のために有用な視点の提供が待たれている。

本研究は2000年から2018年7月までの養護教諭のコーディネーション行動に関する研究を取り上げ、その動向と今後の課題について検討することを目的とする。



II 方法

上記の間に Google Scholar に登録された養護教諭のコーディネーションに関する論文を検索した。養護教諭、コーディネーション、コーディネーション行動、コーディネーション能力、コーディネーション機能をキーワードとして検索した結果、「養護教諭 コーディネーション」550 件、「養護教諭 コーディネーション行動」62 件、「養護教諭 コーディネーション能力」28 件、「養護教諭 コーディネーション機能」19 件であった。こうして検索した論文の重複を除き、研究目的に応じた内容で入手可能な 22 本を選択した。次に研究の内容や方法について全体的な特徴をとらえるために、論文の内容をテキストマイニング手法「KH Coder」を用いて、頻出語や語同士の共起関係を分析した¹³⁾。

III 結果と考察

1. 養護教諭のコーディネーション研究に関する文献の全体像

論文の共起関係を分析した結果、8 グループに分類された。続いて、類似した内容を 4 カテゴリーに整理し、「I 心の健康」「II 特別支援教育（学校）における医療的ケア」「III 子供への対応と連携」「IV コーディネーターの役割と機能」と命名した（Table 1）。

2. カテゴリーの内容

1) 心の健康

養護教諭の活動の中でもとりわけ心の健康に注目した論文を検討した結果、3 点の特徴が見られた。

(1) 養護教諭のコーディネーションプロセス

まず、コーディネーション行動のプロセスに関する研究は、養護教諭の実践を分析した質的調査と質問紙による量的調査の手法が用いられていた。内田・海老澤・片山・高橋・斎藤¹⁴⁾は、養護教諭 64 名を対象に自身がコーディネートした事例に対して質問紙調査を行った。支援においてコーディネーターとしての役割を果たすために必要だと思われたプロセス

とその要素について自由記述で回答を求めたところ、コーディネーションの展開

プロセスは「ニーズの発見」「アセスメント」「計画立案」「実施」「評価」の 5 段階であった。保健室で子供と直接かかわり対応するために、すべての段階で多くの関係者と連携して異なる立場や役割の特性を引き出し、効果的に機能させるために調整していた。コーディネーターとして必要な要素が多く抽出されていた。

中村・塚原・伊豆・栗原・大森・佐藤・渡邊・石崎・西山¹⁵⁾は、熟練養護教諭 4 人に心の健康問題をもつ子供の対応でうまくいった事例の

Table1 カテゴリーとグループの関係

大カテゴリー	I 心の健康		II 特別支援教育（学校） における医療的ケア	III 子供への対応と連携			IV コーディネーター の役割と機能	
グループ	養護教諭のコーディネーションに関する研究	因子と項目	特別支援教育（学校） における医療的ケア	子供への対応と連携	生徒とスクールカウンセラー	担任と保護者	コーディネーターの役割と機能	チーム援助
頻出語句	養護教諭 学校 保健 組織 必要 研究 行う 教育 コーディネーション能力	因子 項目	医療的ケア 特別支援 看護 ケア	連携 子供 関わる 対応 支援 問題	スクールカウンセラー 生徒	保護者 担任	役割 機能 コーディネーター	チーム 援助 活動



プロセスを検討した。その結果、「問題の洗い出し」の段階、「子供との関わり」や「情報収集」の段階、「学校内外での対応」や「子供への対応」の段階、「事後対応」の段階を経ており、「情報収集」や「学校内外での対応」の段階では学校内外の体制整備や助言や相談を行う「連携」段階も並行していた。機能的な連携を生み出すための支援チームのメンバー選出、事例検討の推進、関係者間のズレやギャップへの対応、関係機関との連携における役割分担など細やかなコーディネーション行動を明らかにした。

ここでは対応プロセスに内包されていた養護教諭固有の行動が可視化されている。特徴のひとつは「ニーズの発見」や「問題の洗い出し」の段階にある。養護教諭は予防的な視点を重視しているため、遅刻・欠席や保健室来室状況、衣服の汚れなど普段との違いを早期発見しやすい。「情報収集」や「アセスメント」段階への速やかな接続は問題の深刻化を防止するとともにスムーズな解決にもつながる。今一つの特徴はプロセス全体にかかわる「連携」である。関係機関との連携の窓口として、コーディネーター的な役割を果たしているため、支援者として子供と関わるだけでなく、コーディネーター的存在としての自覚が重要であることが示された。

(2) コーディネーション行動とコーディネーション行動に関する因子

次に、コーディネーション行動とコーディネーション行動に関する能力・権限に関する研究である。瀬戸・石隈⁴¹⁶⁾、秋光・白木¹⁷⁾、鈴木・鎌田・徳山・淵上⁷⁾は、学校内外の支援資源を調整しながらチームを形成して行う個別支援コーディネーション行動、システムレベルで支援活動を促進するシステム支援コーディネーション行動、そしてこれらの行動を支える

能力や権限についてどの程度実行しているかを調査した。鈴木らの研究の調査対象は養護教諭のみであるが、秋光らは教育相談担当者・生徒指導主任・学年主任を加え、瀬戸らはさらにスクールカウンセラーを加えた5職種である。調査結果では対象者の職種や学校種により幾分かの違いがみられた。

まず、個別支援コーディネーション行動で先行研究に共通した因子は「説明・調整」「アセスメント・判断」担任・保護者・専門家との「連携」で、違いが見られた因子は「仲介行動」「評価計画」であった。次に、システムコーディネーション行動で共通した因子は「マネジメント」「情報収集」「広報活動」「ネットワーク」で、違いが見られた因子は「子供の心身の状態把握」であった。また、コーディネーション行動を支える能力や権限に関する先行研究の因子は「チーム形成能力」「話し合い能力」「状況判断」「専門的知識」「役割権限」でいずれの研究にも共通していた。さらに養護教諭の個別支援コーディネーション行動とシステムコーディネーション行動はすべての因子間で正の関連を示していた。コーディネーション能力・権限もコーディネーション行動のすべての因子に正の関連を示しており、これらは相互に関連して支援を促進することが示唆された。

ところで、瀬戸・石隈⁴¹⁶⁾の報告では、コーディネーション行動や能力・権限について養護教諭の自己評価は生徒指導主任、教育相談主任、学年主任よりも低いというものであった。しかし、調査対象とした5職種のうち養護教諭以外は勤務年数が10年以上で、かつ分掌リーダーの役割を担っていたため、秋光・白木¹⁷⁾は、調査対象の生徒指導部長、教育相談主任、学年主任と養護教諭の経験年数を10年以上に揃え、複数の分掌兼務教諭を除外して分析した。その結果、システムに関するコーディネーション行



動の第3因子として新たに抽出された「子供の心身の状態把握」は、養護教諭が他の分掌よりも得点が高く中心的な働きをしていることを確認した。また、他のコーディネーション行動や能力・権限に対する自己評価も生徒指導主任を除く分掌担当者と同程度であった。さらに、鈴木・鎌田・徳山・淵上⁴⁾は、経験年数の長短が個別支援コーディネーション行動に、学校規模や学校種がシステムコーディネーション行動に、保健主事兼務や相談部担当の校務分掌がコーディネーション行動や能力・権限に影響を与えていることを報告した。

では、養護教諭がコーディネーターとしての役割を遂行することによるポジティブな側面はあるのだろうか。藤井・中村¹⁸⁾は、個別支援コーディネーション行動とシステムコーディネーション行動が養護教諭のアセスメントに及ぼす影響について調査した。その結果、コーディネーション行動を積極的に行っていると認知している養護教諭ほど生徒の記録を適切に管理し、効果的なアセスメントを行っていた。つまり、養護教諭のコーディネーション行動は個別支援チームや学校全体の支援システムの向上に寄与するだけでなく、養護教諭のアセスメントという専門的な力量向上にも繋がることを示している。

秋光・白木¹⁷⁾は養護教諭の職務満足感が「心の支援活動の実践」「養護教諭としての存在感の実感」など7因子構造から成ることを明らかにした。そして、職務満足感に強く影響しているのはシステムコーディネーション行動の「マネジメント」「情報収集」因子や、コーディネーション行動を支える能力・権限の「チーム形成」「役割権限」「専門知識」因子であることを報告した。さらに、個別支援コーディネーション行動よりシステムコーディネーション行動の方が職務満足感が高いことから、養護教諭は特

に学校全体に関与することがモチベーションに影響することを示唆した。

養護教諭は、保健室に来室した子供の問題が学習、心理・社会面、進路面、健康面のいずれであっても、問題状況の解決や子供の成長発達への支援等を学校全体の問題としてとらえており、2つのレベルのコーディネーションを意識して行動していた。中坊¹⁹⁾は、1989年ごろから急増し始めた不登校などの対応で保健室での個人的な対応になることを防ぐため、チーム会議を発足させた。徳山²⁰⁾も家族と連携する場合の10の基本姿勢を挙げた中で、養護教諭はキーパーソンでありコーディネーターでもあり、その機能の向上が学校精神保健活動の充実につながっていると報告している。養護教諭の健康相談はコーディネーション行動そのものであり、職に対する自律性が教育の目標達成のために行動を起こすモチベーションに繋がるということが述べられた。

(3) コーディネーション行動と学校組織

コーディネーション行動に必要な要因や、コーディネーション行動が養護教諭に与える影響について、学校組織との関係から検討した研究である。相楽・石隈²¹⁾は、生徒指導の課題を抱える中学校において教育相談システムを構築した実践をもとに、保健主事、教育相談部長兼務という権限委譲がコーディネーションを行いやすい立場であったことを述べている。相談システムを構築するプロセスでは、問題意識の共有、援助チームの実践、活動の見直しのそれぞれの段階で話し合いの場を設定したり職員全体に共通理解と意識の啓蒙を行ったりして、組織の状態のアセスメントと丁寧なフィードバックがなされていた。このようなコーディネーション行動が信頼関係を培い、その成果はシステム構築の成功だけでなく保健室での個別支援



におけるサービスの充実にも表れていた。保健室の問題は学校全体の問題であるとの実践者の信念と委譲された権限が共鳴して、相談システムの構築に活かされたと思われる。

留目²²⁾は学校組織における養護教諭の役割変容に関する事例報告をしている。学級崩壊した小学校のクラスで不調を訴える子供を保健室で一時預かりすることについて、教員と養護教諭間で不一致であった役割認知について改善に挑んだ。養護教諭の生徒指導部会への参加を通して支援対象の再検討を提案したり養護教諭の役割変容を実現したりして、学校組織の活性化に貢献していった。管理職との信頼関係、管理職による生徒指導組織の再編成の推進、学校組織体系と保健室経営の関係性の明示には、管理職のリーダーシップが作用していたと考えられる。

内田・海老澤・片山・高橋・斎藤¹⁴⁾は、養護教諭が子供に対応する際にコーディネーションを強く意識し続けるためには、職場環境が不可欠であることを述べている。職場環境について、鈴木・鎌田・徳山・淵上²³⁾は職場風土とコーディネーション行動、能力・権限の関係について対照的な特徴を持つ2つの職場風土²⁴⁾をもとに検討している。ひとつは協働的風土で、教師が相互に情報を共有しながら共通理解を深め、忌憚のない意見を交わし合いながら開かれた学校づくりを目指して協力し合う職場が持つ雰囲気である。2つ目の同調的風土は、表面的なまとまりはあるように見えるが、教師個人は本当は別の考えを持っているにもかかわらず、集団圧力に抗しきれずに同一行動をとるような職場が持つ雰囲気である。コーディネーション能力と役割・権限が発揮されるのは、同調的風土が低く協働的風土が高い職場環境である。また、個別支援コーディネーション行動は、同調的風土が低ければ促進され、高いと抑制さ

れる。システムコーディネーション行動は協働的風土に影響を受ける。さらに、コーディネーション行動は同調的風土の場合は経験年数により異なり、協働的風土の場合は学校種や保健主事兼務の有無で異なる。

養護教諭が学校組織体制に積極的に関与するためには、職に対する自律性、教職員や管理職との関係、職場風土、役割・権限など組織体制が影響することが示唆された。徳山²⁵⁾は、養護教諭が行ってきた健康相談や個別の保健指導を学校組織の視点から分析したとき、養護教諭のコミュニケーション能力や連携など協働関係構築に関する能力だけでなく組織風土や学校保健の学校経営への位置づけなど学校側の問題を懸念している。コーディネーターの権限を明示することも重要²⁶⁾ではないだろうか。社会認知理論によれば、人間は環境と行動との間に相互に影響を与え変化をもたらし、行動は自己効力感の影響を受ける²⁷⁾。今後はコーディネーション行動の成立に至るプロセスや行動の促進や抑制に関する要因などを解明していく必要がある。

2) 特別支援教育（学校）における医療的ケア

医療技術の進歩や在宅医療の普及を背景に、特別支援学校には医療的ケアを必要とする児童生徒が増加してきた。それに伴い、2004年厚生労働省より特別支援学校において看護婦が常駐し、教員は必要な研修を受けることを条件として、たんの吸引、留置された管からの経管栄養、自己導尿の補助等の医療的ケアを実施することはやむを得ないとする考え方が示された²⁸⁾。これ以降、特別支援学校では看護師を中心としつつ教員と看護師の連携による実施体制の整備が急速に進み²⁹⁾、養護教諭をコーディネーターとして位置づける動きが進んできた。2012年には特定の児童生徒等の特定の行為に



限られる一定の研修を受けた介護職員等は一定の条件の下にたんの吸引等の医療的ケアが実施できるようになったことを受け、特別支援学校の教員も、制度上医療的ケアを実施することが可能になった³⁰⁾。具体的内容は、口腔内の喀痰吸引・鼻腔内の喀痰吸引・気管カニューレ内部の喀痰吸引・胃ろう又は腸ろうによる経管栄養・経鼻栄養の5項目である³⁰⁾。特別支援学校における医療的ケアを必要とする児童生徒数は2017年度は8,218名で在籍者数の6.0%を占め、対応する看護師数は1,807名となっている³¹⁾。このような背景を受け、看護師、担当教員、養護教諭が協働して学校生活がスムーズに行えるよう研究が進められてきた。

野坂・沖西・津島³²⁾は宿泊を伴う校外学習の援助事例の分析から、養護教諭が無意識に行っていたコーディネーション行動を確認、分析し、位置付の必要性を述べた。次に、津島⁵⁾は、さらに詳細に質的調査を行い12のコーディネーション機能を抽出した。そして、岡本・津島³³⁾は5つのコーディネーションの展開プロセス(ニーズの発見、アセスメント、計画立案、実施、評価)と、各段階を構成している19の要素(成長・発達を願う教育的ニーズ、安全な支援体制ニーズ、情報把握の基礎知識、医学的情報収集、看護学的情報収集、問題の明確化、判断、目標および役割の明確化、専門性や意見・願いの尊重、安全確保、社会資源の活用計画、計画の共有、役割実行、専門的活動、社会資源の活用、権利擁護、目標達成度の評価、コーディネーション過程の評価、今後の展望である)を明らかにした。さらに、下川・津島³⁴⁾は医療的ケアにおいて養護教諭のコーディネーションに必要な能力を調査し、6つの新たな能力(コーディネーションの必要性の判断、体制の中で権限を持つ能力、幅広い視野を持つ能力、多職種間でケア内容・役割分担内容を共通理解させる

能力、会議の必要性を提案する能力、議題準備の根回しをする能力)を抽出した。

続いて岡本・津島³⁵⁾は特別支援学校養護教諭を対象に、能力育成のための研修プログラムニーズ調査を行った。その結果、研修プログラムニーズ48項目中21項目について、半数以上が「非常に重要である」と回答し、コーディネーションの役割に関する重要性が示された。希望する研修内容は、医学的知識の獲得ニーズ、コーディネーションプロセスを進めるためのニーズ、チーム援助の体制・連携推進のためのニーズ、会議等を運営していくためのニーズであった。特別支援学校の種類や経験年数によって、重要性の認識や自己評価の程度が異なることが示唆された。

医療的ケアについて、特別支援学校においては養護教諭のコーディネーションが可視化されてきたが、通常学校での研究は僅少である。清水³⁶⁾は、医療的ケアが必要な子供が通学し看護師が配置されている通常学校の養護教諭が、看護師とどのように関わり看護師をどのように捉えているかについて調査した。その結果5つのコアカテゴリーを示した。ひとつ目のカテゴリーは、医療的ケアを要する子供の緊急時に対応しやすいようにするなど「医療的ケアを要する子供が健康に学校生活を送れるようサポートする」、2つ目は医療的ケアを要する子供の情報を得ていないなど「医療的ケアを要する子供の連携の輪に積極的に加わっていない」、3つ目は看護師が子供を見ているので安心であるなど「看護師の存在は必要である」、4つ目は医療的ケアを要する子供にどう関わればよいかわからないなど「医療的ケアを要する子供や看護師と関わりにくい」、5つ目は教育の専門家として医療的ケアを要する子供に関わることが大切であるなど「特別ではなく医療的ケアを要する子供の学校生活をサポートする役割がある」



であった。そして今後の課題として、看護師が養護教諭と関わりやすい環境整備、養護教諭の複数配置と医療的ケアに関する知識の獲得や支援委員会の実施などの必要性を述べた。

特別支援学校における医療的ケアに関する養護教諭のコーディネーションについては一定の研究が蓄積されている。今後の課題は概念の整理や数量的な検討³⁷⁾、養護教諭に関する課題³⁸⁾に対する理論的研究³⁹⁾、通常学校における医療的ケアと養護教諭のコーディネーションについて研究が待たれる。

3) 子供への対応と連携

教育・福祉・医療における連携は、異なる組織が協働の目標を達成するための手段であり、その目標を達成するためお互いに不足な部分を補完しながら責任を持って協力する過程⁴⁰⁾である。養護教諭が担任や保護者と連携する際の勘所について、中村ら¹⁵⁾は、子供の保健室での様子について情報交換をする際、担任にはタイミングを見てこまめに伝えること、保護者には子供の問題と向き合えるように心配りしながら伝えること、判断は担任や保護者の意思を尊重することを挙げている。また留目²²⁾は、児童は担任と良好な関係を築くことができこそ生かされ成長するという信念を持つこと、保健室に来室する児童や保護者への支援は担任との信頼関係を深めることができるように行うこと、気になる子供や保護者への対応で困難感を抱える担任は教職員全員でサポートすることなどを示している。スクールカウンセラーと養護教諭の連携について、水野ら⁴¹⁾は養護教諭がコーディネーターであるとスクールカウンセラー不在時の生徒の見守りができること、担任や保護者から得た情報をすぐにカウンセラーに伝えることができること、カウンセリングに抵抗がある生徒でも保健室で顔なじみになる工夫

ができることなどの具体例を紹介している。相談活動の専門家であるスクールカウンセラーと相談活動の専門知識を有する養護教諭の類似性は、異なる専門性や勤務体制の基盤に立つ他職種が連携する場合の促進要因となることが示されている。

連携を成立させるための養護教諭に共通した能力として、コミュニケーション能力、会議や体制づくりにかかわる能力、複数の人や機関との関係を調整する能力、管理職と関係を築く能力、情報収集や判断にかかわる能力が抽出されている。また、岩崎⁴²⁾は、協働を目指すための連携には学校外の関係者や関係機関のスタッフとの対話が重要であり、その際、学校や地域をシステムとして考える視点の有用性を述べている。鈴木・鎌田らは、養護教諭の連携行動はチーム形成能力と関係が強く、しかもコーディネーション行動全体に影響を及ぼすことを示している²³⁾。子供への支援には、複数の支援者が同じ目的を持って協働していくためによりよい連携が求められる。養護教諭が支援者をよりよく繋げ、協働的な組織の構築を促すコーディネーターであるために、日常的に行っている連携の価値を再度意味づける必要があると思われる。

4) コーディネーターの役割と機能

これまで、子供の支援において教師を中心とした複数の支援者によるチーム援助が効果を上げてきた背景にはコーディネーターが存在し、その担い手として教育相談担当者・養護教諭・生徒指導主任・学年主任・スクールカウンセラーらがそれぞれの立場でその役割を遂行してきた⁴³⁾。養護教諭も子供の保健室来室の背景にある心理的サインの早期発見や情報収集、情報発信が行いやすい立場にあることを活かして学校全体で支援していくコーディネーターの役割



を意識してきた⁴⁴⁾⁴⁵⁾。特別支援学校においては、医療的ケアを中心に養護教諭をコーディネーターとして位置づける動きが進んでいる。養護教諭が学校保健活動推進の中核的な役割や、学校内外の連携を推進するコーディネーターの役割を十分果たせるようにするために環境整備や法整備が検討されなければならない²⁾。研修⁴⁶⁾や保健室業務への影響¹⁸⁾への対応について研究的に進めていくことが望まれる。

現在学校で指名されている特別支援教育コーディネーターが普通小・中学校に於いて求められる主な役割には、校内の教員の相談窓口、校内外の関係者との連絡・調整、地域の関係機関とのネットワーク作り、保護者の相談窓口、教育的な支援がある。佐々木ら⁴⁷⁾は、特別支援教育コーディネーターの現状と課題を明らかにした上で専門的機能の充実を意図した研修会を実施し、以下の考察を報告している。通常の学級担任の特別支援教育への理解や連携を図るなど学校全体で校内支援体制を整えていくこと、外部専門家の効果的な活用とサポート体制が必要であること、コーディネーターの機能充実のためにネットワークづくりを意図した研修会の開催などを検討する必要があることの3点である。これらは養護教諭としても同様の視点である。指名の有無にかかわらず、養護教諭の活動にはコーディネーション行動が内包されていることを自覚し、コーディネーターとしての役割と機能の充実に向けた取り組みが必要である。

IV 今後の研究課題

本稿では、養護教諭のコーディネーション行動に関する近年の研究を4カテゴリーに分類して概観した。以下にレビューを通して明らかになった養護教諭に関する研究における課題を述べる。

まず、コーディネーション行動の生起に至る要因やそのプロセス、またコーディネーション行動の促進や抑制に関する要因などを解明していく必要があるだろう。これまでの研究では、職員間や管理職との関係、職場の雰囲気、職に対する自律性などが養護教諭の学校組織体制への関与に影響していると報告されている。その他にも、行動を起こすために必要なモチベーションや個人個人のパーソナリティなどの要因も関与が予想される。今後はこれらがどのように影響し合っているのか、体系的に整理していきたい。コーディネーション行動の生起を提示することができれば、自らの考えや経験を照らし合わせてコーディネーション行動を理解することができたり、学校組織としての課題を提示したりすることが可能になり得る。

次に、サンプリング方法やサンプリングサイズおよび研究方法に関する問題があるだろう。研究上の限界もやむを得ないことではあるが、多くの研究が小規模サンプルの研究であり、対象者の背景要因、特徴等を十分考慮していない傾向がある。養護教諭は多くの学校では1名であり、勤務する学校も子供園、幼稚園、小学校、中学校、中等学校、高校、特別支援学校と多種に渡る。また、在籍する児童生徒数も数名から1000人以上の大規模校までである。養護教諭は多くの学校では1名であり、勤務する学校も子供園、幼稚園、小学ある。回答者の実態から、データが想定する母集団を代表しているかどうか、サンプルの偏りがあるとすればどのような偏りか、学校種や規模による養護教諭の活動の相違点を含めて慎重に検討する必要があるだろう。サンプルの問題は、研究知見の一般化可能性、再現性と頑健性とも関連する⁴⁷⁾。今後は単発的でなく、系統的な研究が計画される必要がある。また、質的検討と量的検討の研究が相補的に進むと信頼性が高まると思われる (Table



2)。

養護教諭は専門職であるとされながら独自の学問的な基盤が弱く、その養成においては近接領域の学問を参考にし、職務を遂行する上でもその技術や方法論を援用してきた経緯がある。研究の理論的背景を明確にして先行研究を積み上げ、モデルを精緻化する研究が増えていくと

よいのではないだろうか。養護学の研究のヒントはフィールドになることが多く、実践と理論との相互関係の中で研究が発展し、社会的意義を高めていくことが期待される。

Table2 養護教諭のコーディネーション研究の現状

研究内容	研究方法	個別支援コーディネーション行動のプロセス・要素	システムコーディネーション行動のプロセス・要素	コーディネーション行動に必要な能力や権限	コーディネーション行動に必要な組織的な要因	コーディネーション行動が養護教諭に与える影響	コーディネーションに関する研修ニーズ
心の健康	質的研究	○	○	○	○	—	—
	量的研究	○	○	○	○	○	—
医療的ケア	質的研究	○	○	—	—	—	—
	量的研究	—	—	—	—	—	○



引用文献

- 1) 文部科学省：現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～，2017
- 2) 文部科学省中央教育審議会答申 2017
- 3) 岡野明美，上野昌江，大川聡子：保健師のコーディネーションの念分析，大阪府立大学看護学雑誌 24(1)，21-30，2018
- 4) 瀬戸美奈子，石隈利紀：高校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究—スクールカウンセラー配置校を対象として—，教育心理学研究，50(2)，204-214，2002
- 5) 津島ひろ江：養護教諭のコーディネーション機能，保健の科学，49(2)，131-137，2007
- 6) 岡本啓子，津島ひろ江，小海節美：わが国における養護教諭のコーディネーションに関する研究動向，川崎医療福祉学会誌，18(1)，255-262，2008
- 7) 鈴木薫・鎌田雅史・徳山美智子・淵上克義：養護教諭のコーディネーションと学校組織特性に関する研究（第I報），学校保健研究，5(2)，140-152，2013
- 8) 文部科学省：特別支援学校における医療的ケアへの今後の対応について。 Available at:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/087/houkoku/1314048.htm Accessed January 3, 2019
- 9) 文部科学省：教職員のための子供の健康相談及び保健指導の手引き，2011
- 10) 文部科学省：子供たちを児童虐待から守るために - 養護教諭のための児童虐待マニュアル -，2014
- 11) 文部科学省：チーム学校としての学校のあり方と今後の改善方策について。 Available at:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm Accessed January 3, 2019
- 12) 文部科学省：発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制ガイドライン。 Available at:http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1383809.htm Accessed January 3, 2019
- 13) 樋口耕一: KH Coder リファレンス・マニュアル。社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—（初版7刷），101 - 202，ナカニシヤ出版，京都，2017
- 14) 内田清香，海老澤紫，片山美千恵，高橋雅子，高橋裕子，斎藤ふくみ: 養護教諭がコーディネーターとしての役割を果たすために必要な要素の構造化，茨城大学教育実践研究，37，243-255，2018
- 15) 中村恵子，塚原加寿子，伊豆麻子，栗林祐子，大森悦子，佐藤美幸，渡邊文美，石崎トモイ，西山悦子：心の健康問題をもつ子供の養護診断・対応に関する研究，新潟青陵学会誌，6(3)，13-24，2014
- 16) 瀬戸美奈子，石隈利紀：中学校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究 - スクールカウンセラー配置校を対象として，教育心理学研究，51(4)，378-389，2003
- 17) 秋光恵子，白木豊美：チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響，教育心理学研究，58(1)，34-45，2010
- 18) 藤井小百合，中村仁志：養護教諭のアセスメント能力の形成に影響を与える要因，山口県立大学学術情報，11[大学院論集19]，2，135-146，2018
- 19) 中坊伸子：第41回児童青年精神医学会ミニシンポジウム - 養護教諭の立場から -，



- 児童青年精神医学とその近接領域, 42(5), 134-135, 2001)
- 20) 徳山美智子: 学校精神保健活動における家族との連携の取り方-, 児童青年精神医学とその近接領域, 42(5), 400-407, 2001
- 21) 相楽直子, 石隈利紀: 教育相談のシステム構築と援助サービスに関する研究—A 中学校の実践を通して—, 教育心理学研究, 53, 579-590, 2005
- 22) 留目宏美: 養護教諭の役割の安定化のプロセスに関する一考察 Y 市立 Z 小学校を対象として—, 学校経営学論集, 3, 1-11, 2015
- 23) 鈴木薫・鎌田雅史・徳山美智子: 養護教諭のコーディネーション行動に関する研究(第Ⅱ報) —学校組織特性との関連及び養護教諭にもたらす影響—, 日本健康相談活動学会第 14 回学術集会, 141, 2018
- 24) 淵上克義・小早川祐子・下津雅美・棚上奈緒・西山久子: 学校組織における意思決定の構造と機能に関する実証的研究—職場風土, コミュニケーション, 管理職の影響力—, 岡山大学教育学部研究録, 126, 43-5, 2004
- 25) 徳山美智子: 健康相談活動を進めるための養護教諭と多職種との連携—他(多)職種連携を学校経営に生かすために「何をすべきか」「これからどうするか」—, 日本健康相談学会夏季セミナー資料, 16-57, 2011
- 26) 田村節子: スクールカウンセラーによるコア援助チームの実践—学校心理学の枠組みから—, 教育心理学年報, 42, 168-181, 2003
- 27) Bandura, A: Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215, 1997
- 28) 文部科学省: 資料 4 盲・聾・養護学校におけるたんの吸引等の取扱いについて(通知). Available at: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/087/shiryo/attach/1313149.htm Accessed January 3, 2019
- 29) 大阪府教育委員会支援教育課: 大阪府立支援学校医療的ケア実施要領(2014)
- 30) 文部科学省: 特別支援学校等における医療的ケアの今後の対応について(通知). Available at: http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1314510.htm Accessed January 3, 2019
- 31) 文部科学省: 平成 29 年度特別支援学校等の医療的ケアに関する調査結果について(別添 3). Available http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/___icsFiles/afie/ldfile/2018/03/29/1402845_04_1.pdf Accessed January 3, 2019
- 32) 野坂久美子, 沖村幸枝, 津島ひろ江: 養護学校における児童生徒の医療的ケアに関わる養護教諭のコーディネーション機能の実際, 川崎医療福祉学会誌, 15(1), 123-133, 2005
- 33) 岡本啓子, 津島ひろ江: 養護教諭のコーディネーション過程を構成する要素の明確化—特別支援学校養護教諭の実践の分析から—, 日本養護教諭教育学会誌 13(1), 55-71, 2010
- 34) 下川清美, 津島ひろ江: 医療的ケアにおける養護教諭のコーディネーション過程と必要な能力—特別支援学校の養護教諭を対象に—, 日本養護教諭教育学会誌 14(1), 33-43, 2011
- 35) 岡本啓子, 津島ひろ江: 養護教諭のコーディネーション能力育成の研修プログラムニー



- ズー全国特別支援学校養護教諭への意識調査から一，学校保健研究 53(3)，250-260，2011
- 36) 清水史恵：通常学校において医療的ケアを要する子どもをケアする看護師が認識している教諭との協働，日本小児看護学会誌，20(1)，55-61，2011
- 37) 瀬戸美奈子：学校におけるチーム援助のコーディネーションに関する研究の動向，関西福祉科学大学紀要，14，77-86，2010
- 38) 山田景子，津島ひろ江，小河孝則：医療的ケアを必要とする子供へのケア技術習得に関する養護教諭のニーズ調査ー全国肢体不自由特別支援学校を中心に一，小児保健研究，74(2)，214-222，2015
- 39) 津島ひろ江：理論編 肢体不自由児教育における医療的ケアのチームアプローチとコーディネーション，発達障害研究，37(2)，127-135，2015
- 40) 李美貞・八重田淳・奥野英子：知的障害者の職業リハビリテーション関連従事者の連携関連要因，職業リハビリテーション，21，2-9，2008
- 41) 水野裕子，中村俊哉：養護教諭とスクールカウンセラーのより良い連携の在り方に関する研究，福岡教育大学紀要．第4分冊，教職科編，福岡教育大学，65，27-38，2016
- 42) 岩崎和子：システム論を手がかりに養護教諭の役割を再確認対話がひらく，こころの多職種連携，こころの科学増刊，72-81，2018
- 43) 石隈利紀：教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス，学校心理学，誠信書房，東京
- 44) 木嶋葉子，斉藤ふくみ：心因性の保健室来室児童への健康相談活動のあり方ー心理教育的援助サービスを組織的に進めていくために一，茨城大学教育学部紀要（教育科学），67，557-570，2018
- 45) 清水麻理子：養護教諭の学校精神保健領域における対応と，他職種との連携と期待についての調査研究，龍谷大学大学院文学研究科紀要，33，93-116，2011
- 46) 大野泰子：養護教諭の職務における求められる力量の形成ー連携力からコーディネート力の構築へー鈴鹿短期大学紀要，32，71-80，2012
- 47) 中村健，佐々木恵：特別支援教育コーディネーターのためのインクルーシブ教育システム構築のポイント．Available at:file:///at:file:///C:/Users/kaoru/Desktop/ 特支 コーパンフ .pdf Accessed January 3, 2019
- 48) 森口佑介：発達科学が発達科学であるためにー発達研究における再現性と頑健性，心理論，59，30-38，2016